伊勢の中世

第　2　6　6　号
伊勢中世史研究会
平成31年2月1日発行

事務局：〒515-2321　三重県松阪市嬉野中川町1524－121　竹田憲治方
メール　takeda@ztv.ne.jp　ホームページ　http://mietyusei.bakufu.org/

有滝の御頭神事

本稿は平成31年1月12日（土）に行われた「有滝の御頭神事」について、筆者が見学および聞き取りした神事の内容をまとめたものである。

1　有滝集落の概要

有滝集落は現在の行政区分上では三重県伊勢市に属し、宮川が伊勢湾にそそぐ河口部左岸の砂堆上にある。集落はおよそ12組420世帯で構成されている。特に1～6組がある範囲には獅子頭を制作した楠が生えていたと言われる「親元」、集落の氏神社で神事の舞台である八玉神社のほか本覚寺（真宗）、大雲寺（曹洞宗）、有滝漁港などがある。かつて神事を担う頭屋はこれらの組から選ばれていた。一方、7～12組のある範囲は「広山」と呼ばれ、やや海岸部から奥まった場所に位置し、少し距離が離れている。なお、八玉神社は社伝によれば江戸期は八王子社と呼称されていた。

2　神事の時期および構成

神事は毎年1月第2日曜日と定められているが、本年は成人の日と重なり舞手が確保できないとの理由で、前日の1月12日（土）に行われた。集落の各戸には入口に正月飾りが残されており、神事の翌日に伊勢湾に面した海岸で各戸の正月飾りを燃やし正月が終わるという。この行為を集落では「山入り」と呼称する。

神事はかつて頭屋を中心に行われていたが、現在は町会役員を中心に新たな体制で行われている。神事は役員の他に、八玉神社宮司、舞手（2名）や笛（5名）を担う「神楽師」、太鼓打ち（1名）、組頭から選ばれた「太刀持ち」（1名）などが担う。神楽師の中には若い女性も見られた。

3　神事の内容

＜神事前の状況＞

神事の舞台となる八玉神社では既に神事の準備がされていた。境内への鳥居前には左右に砂盛りがなされ榊が挿し立てられていた。脇には砂が二つのフゴに入れられ置かれていた。袋にはそれぞれ草鞋が入れられていた。本殿は門扉が開かれ、鳥居前と同様に砂盛りに榊が立てられていた。本殿の脇には「獅子殿」があり、社の前に獅子頭を入れる木箱にムシロがかけられオカシラサンが安置されていた。当日は小雨のためシートがかけられ、供え物などの詳細は確認できなかった。

集落内の辻で舞が行われる地点「文太夫辻」にも、フゴに入れられた砂と草鞋が用意されていた。有滝には太夫名を冠した屋号が20軒ほどあるとされ、こうした太夫名を持つ家が元々は神事を担っていた可能性を堀田吉雄が指摘している。

集落の各家の入口部分には正月飾りが確認できた。飾りにはいくつかの形態があり、入口部分の両側に笹竹が立てられ竹に縄を渡し中央に注連縄を掛けるもの、入口の片側に竹を立て先端に注連縄を輪状にして掛けるもの、入口の片側に注連縄だけを輪状にして設置したものが見られた。

＜八玉神社＞午後1時20分

神事関係者一行は先端に剣先を付けた鉾竹と木箱を持ち正装した自治会役員を先頭に、宮司、組頭、神楽師、太鼓が続き、太鼓を打ち鳴らし八玉神社に到着し、鳥居前で一礼し砂盛りに立てられた榊の間を通過して社殿に入った。舞手によって獅子殿からオカシラサンが社殿に移され、宮司により祝詞が奏上され、関係者の玉串奉納、関係者および参観者へのお祓いがなされた。宮司によれば、この時にオカシラサンに魂が入れられるとのことであった。また、神楽師の内、笛と太鼓の奏者は社殿の垣内には入らず、儀式を待っていた。儀式が終わると、神楽師や関係者は榊が挿された砂山を崩し、用意されていた砂を撒いて舞場を作っていた。舞は五起しの舞で、一段ごとに自治会役員の右肩にオカシラサンを預けて、オカシラサンを被ったままで休憩を取っていた。

＜八玉神社鳥居前＞午後2時10分

社殿前での舞が終了すると、次は鳥居前に移動し舞が行われる。鳥居前でも神楽師と関係者により榊が立てられた砂山が崩され、砂が撒かれた。その上に藁が積まれ、火がつけられた。ここでは七起しの舞が行われ、焚かれた火を正面に舞が進行する。舞の最終版には太刀持ちからオカシラサンに太刀が渡され、火に向かってオカシラサンが切り払う所作をする。舞が終了すると参観者にみかんが配られ、オカシラサンに頭を噛んでもらう光景がみられた。

＜集落巡行＞午後3時～

鳥居前での舞が終了すると参観者は散会し、神楽師や太刀持ちなどは公民館へ休憩に向かう。一方、オカシラサンは浴衣を着た組頭に預けられ、組頭の一人がオカシラサンを被り集落内を巡行する。巡行では最初に「親元」へ向かい、大雲寺、本覚寺に向かう。これらの地点では所作やククメモノなどは特段確認できなかった。その後、「文太夫の辻」へ到着したオカシラサンは太鼓の上に置かれ神楽師の到着を待つ。この辻は、有滝漁港（海）から集落に入った最初の交差点で、電柱には松阪市愛宕さんの札が括り付けられていた。

今回筆者が確認したのはここまでである。これ以降の神事の内容については、『伊勢市史民俗編』を参照されたい。

4　タコについて

本年は自治会役員の家に不幸があったため「タコ」の制作および「タコ投げ」は実施さ

れなかった。しかし、川邊宮司および自治会長のご配慮で、町民クラブに保管されているタコの見本と平成24年度の奉祭状況が撮影されて写真を拝見することができた。

タコは藁を束ねた直径10cm弱の芯に、三つ編みにした輪状の藁を8本結びつけたもので、本来は新藁で制作され青々としているという。今回撮影したものは雌雄の内で雌のもので、雄は芯の中央が若干飛び出しているという。タコは神事当日に制作されるとのことであった。提供を受けた写真には、タコは頭屋宅で平膳の上に向かって右に雄、向かって左に雌が並んで安置される。タコの前にはそれぞれに鯛のほか、三丼（数の子、煮しめ、たつくり）が供えられる。タコの奥には、三方に二重の鏡餅、串柿、蜜柑、丸三方に蜜柑12個、米、カヤの実が供えられる。

タコは神事の際、頭屋宅の庭先での舞の内、六段目が終わる頃に投げられるもので、まず雌のタコを「沖の瀬のタコやー」といって投げ、次に雄のタコを「高の瀬のタコやー」と言って投げ、見物人が取り合うという。タコは江戸時代に伊勢神宮へ奉納していた有滝の特産品で、「多幸」から縁起物とされ、タコを取った家では大漁の縁起を担いで屋根にタコを飾るという。

5　獅子頭について

神事に用いられる獅子頭について、観察した所見を記す。

獅子頭は管見のかぎり銘文は確認できなかった。オカシラサンを計測することはできなかったが、面高に対して奥行が長い。全体としては金箔が施され、鼻先と歯は黒漆、目の周囲と口元は赤漆で表現され、目の中央は黒漆、白目部分は金箔で表現されている。鼻は団子鼻で鼻穴は円形である。左右の鼻孔中には1箇所ずつ穿孔が認められる。上唇が厚く、4条の刻みがあり、側面部分に左右3箇所ずつ穿孔が認められる。鼻孔および上顎の穿孔から、かつて植毛がされていた可能性がある。頬部等には巻毛を表現すると思われる線刻が見られる。歯は犬歯を境に前面が上下4本、側面が上下5本で、犬歯のかみ合わせは下歯が手前、上歯が奥側になり、それ以外の歯は平坦である。眉毛の形状は、頭頂部に付された紙垂により確認できなかった。頭頂部には角が装着され、貫通した角が獅子頭の中で舞手が持てるようになっている。また下顎下部はくり抜かれ把手状になっている。

獅子頭が納められていた木箱の側面には墨書が確認でき、平成元年に舞衣を新調し、年号は確認できないものの平成元年以降に獅子頭を再興したことが墨書されていた。別の面には「弘化四年丁未正月吉日/造之」、また別の面には「－大工田所/万右衛門造之」と判読できる墨書が確認できた。このことから現在神事で使用されている獅子頭は弘化4年（1848）に制作された可能性がある。弘化4年（1848）は獅子頭が大雲寺境内に安置された年と合致し、有滝の御頭神事における一つの画期となったと推定される。なお、神事に用いられる太刀を納める箱には明和2年（1765）の銘があるとされ、神事の起源はさらにさかのぼる可能性がある。また、有滝では天狗役は確認できなかった。

6　まとめ

有滝の御頭神事は、かつて堀田吉雄が「有滝系」と分類し頭屋の形態に特色があること

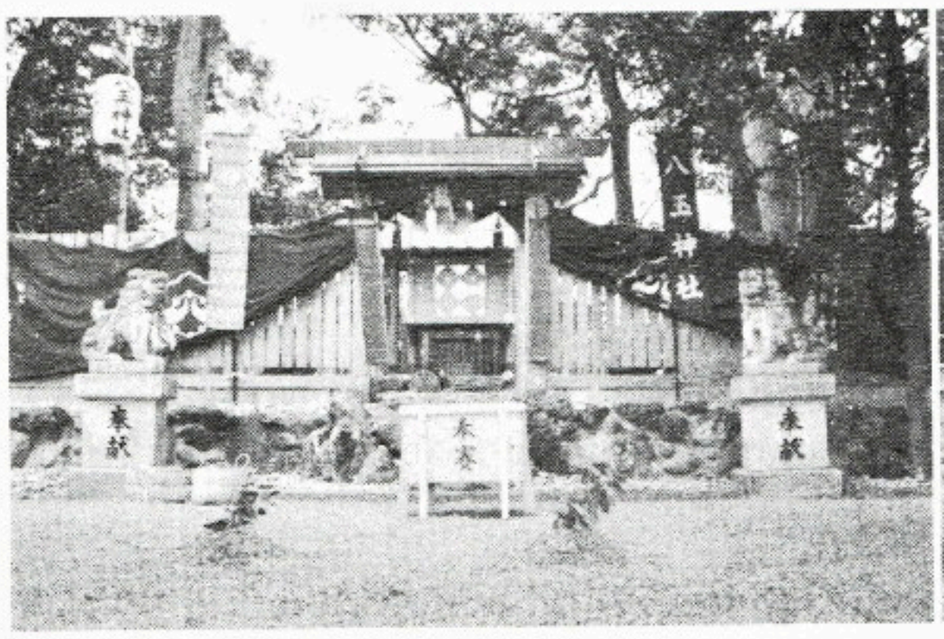
を指摘しているものの、平成 16 年から自治会役員を中心とした運営に変化してきている。今回神事を見学し、引き続き神事が継承されていることを確認できた。しかし、聞き取りでは太刀持ちの役割が認識されておらず、「親元」や寺院への巡行でも所作やククメモノの提供が忘れ去られるなど、オカシラサンへの信仰がかつてと比べ薄らいでいる印象を受けた。本年度も実際は舞手が３人いたが諸事情により２人で務めていたし、舞手が成人式に出席するために神事の日程が変更になるなど、神事を行う苦心が見られた。今回の報告は神事の一部であり、自治会役員宅の不幸による物忌により本年度の神事は変則的なものであったため、来年度以降に補足調査を実施し改めて報告したい。

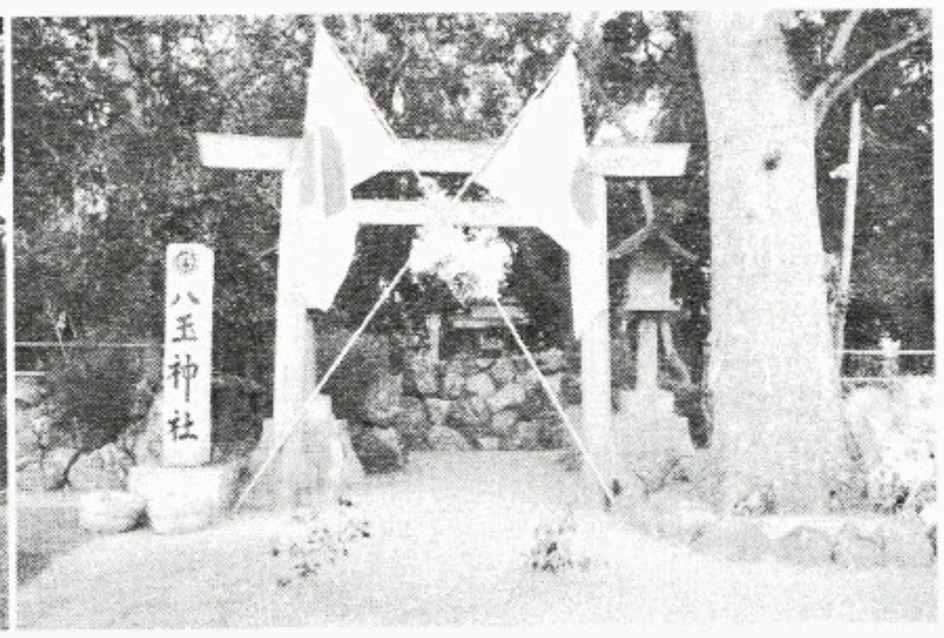
本報告の作製にあたり川邊浩宮司、有滝自治会長、および有滝集落の方々にご協力をいただきました。また、桝屋善則氏からは貴重な写真の提供を受けた。末筆ながら記して深謝申し上げます。

（味噌井 拓志）

＜参考文献＞
堀田吉雄 1969「有滝の御頭神事」『伊勢民俗八ノ二巻』伊勢民俗学会
橋爪芳蔵 1995　『ふるさと有滝の今昔物語』
伊勢市　2009「２　御頭神事」　『伊勢市史　民俗編』

有滝の御頭神事　関連地図





神事前の状況　左：八玉神社前　右：鳥居前

神事前の獅子殿に安置されたオカシラサン（平成 24 年、桝屋善則氏撮影）

舞の前に砂山を崩す神楽師

社殿前での五起しの舞

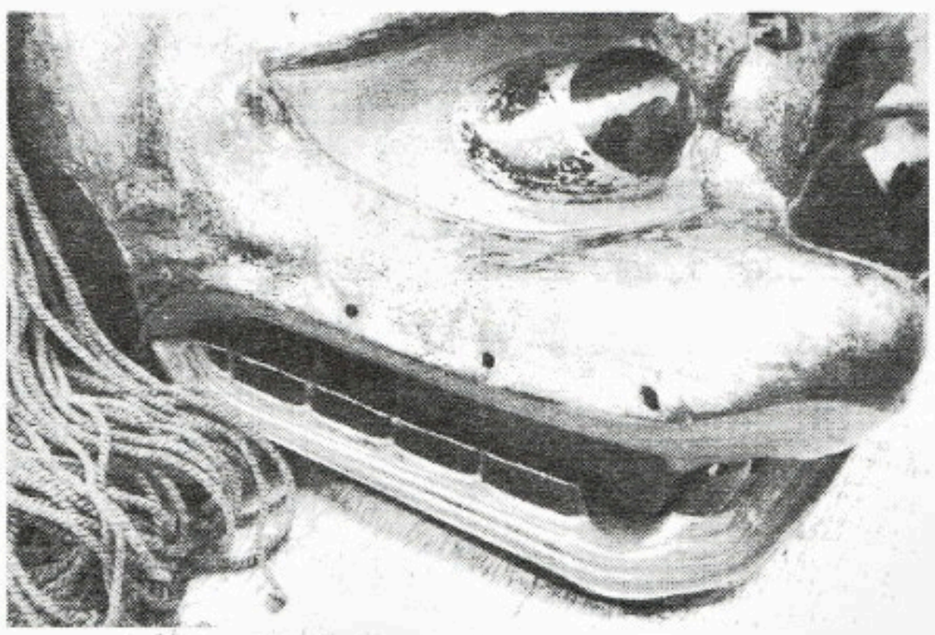
鳥居前での七起しの舞

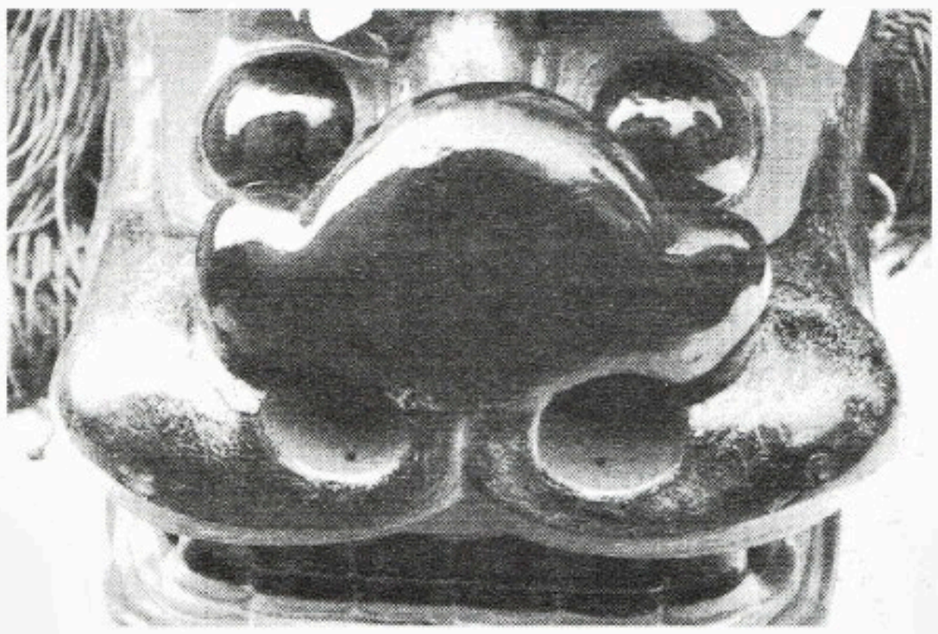
ヘーバイ

「親元」へのお参り

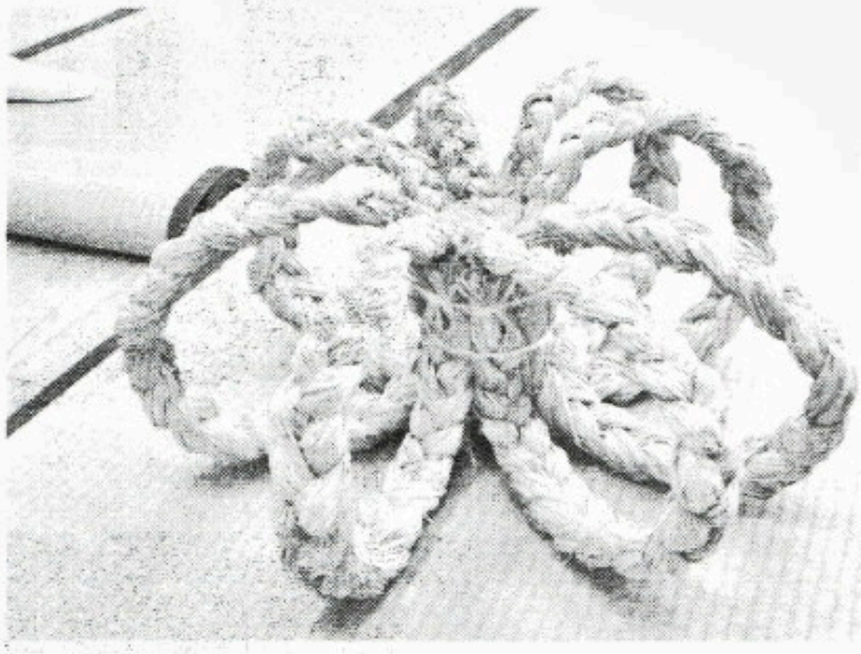
大雲寺へのお参り

集落内を巡るオカシラサン





オカシラサンの鼻と上顎に見られる穿孔



「タコ」（雌）

「タコ」への御供え